

雑草こぼれ話

— 住家を変えれば花卉も雑草 —

鑑賞用の草花として導入された植物が逸出して野生化して帰化植物となり、それが次第に雑草化して、わが国の生態系に影響を及ぼしている例がかなり多く見られるようになった。

ここに取りあげたオオキンケイギク、オシロイバナ、ムシトリナデシコなどもその例である。これらの草花はいずれも鑑賞用に導入され、庭や花壇に植えられ手入れが行き届いている場合は鑑賞用として美しく眺められ、愛される草花であるが、一旦逸出して野生化すると旺盛な繁殖力によって、他の草を押しつけて道端などにはびこり、通行の妨害となり嫌われる雑草となっている。(7)



オオキンケイギク [キク科]

Coreopsis lanceolata L.

北アメリカ原産の多年生草本。株元から茎が多数叢生して高さ30～70cm、夏に茎先に直径5～7cmの黄色の頭状花をつける。明治中期に鑑賞用に導入された。現在は野生化し高速道路の法面などに大群落をつくったり、道端に生え交通の障害になっている。

オシロイバナ [オシロイバナ科]

Mirabilis jalapa L.

熱帯アメリカ原産の多年生草本。枝はよく分岐して横に大きく広がり、茎の高さ約1m。夏に葉腋に細長い筒をもつ直径約3cmの花を夜から朝にかけて開く。花の色は紫赤、黄、白色などがある。江戸時代中期に鑑賞用に導入された。現在は各地に野生化し、道端などにはびこっている。



ムシトリナデシコ [ナデシコ科]

Silene armeria L.

南ヨーロッパ原産の一年生草本。茎は高さ70cm内外。春～夏にかけて茎先に直径1cmぐらいの紫紅色または白色の花を傘状に咲かせる。茎の節間にねばる粘液があるが食虫植物ではない。江戸時代末期に鑑賞用に導入されたが、現在では雑草化して河岸や土手、道端などに一面に広がっているのが見られる。